

# 丸山眞男のアメリカ観

Masao Maruyama's View of the United States of America

江上 琢成

杉森高等学校常勤講師

Takujo Egami

Full-Time Teacher, Sugimori High School

20世紀の代表的知識人・丸山眞男は、アメリカの「ブルジョア民主主義」という特質が、戦前にファシズムに対抗したことを評価したが、戦後は、冷戦に伴って、日本の再軍備やアメリカのマッカーシズムを惹起したと批判した。1961年の訪米後、丸山は、①政治学から政治思想史への研究対象の移行や、②過去の歴史を持たずに近代化したアメリカの不可解さなどを理由に、公でのアメリカ論を避けた。だが丸山は、私的には、アメリカの多様性に関心を持ち続けた。それは、反戦や反核など、右傾化に反省を迫るリベラルな環境が存在したからである。

Masao Maruyama, a representative intellectual of the twentieth century, praised the USA's "bourgeois democracy" for its prewar opposition to fascism, while criticizing it postwar for bringing about the remilitarization of Japan and the McCarthyism that accompanied the Cold War. After visiting the US in 1961, Maruyama avoided giving public lectures on America, first because of a change in research focus from political science to the history of political thought, and second because of the inscrutability of a modernized US without history. However, Maruyama privately maintained an interest in the diversity in the USA. This was because of the existence of a liberal climate that urged reflection on the conservative swing, including antiwar and antinuclear perspectives.

Keywords: 丸山眞男、アメリカ、日米、ハーバード、リベラル

\*投稿時の所属は、慶應義塾大学総合政策学部4年。

## ※凡例

本稿では、丸山眞男の著述や発言の出典について、『丸山眞男集』全17巻(岩波書店)は「集」、『丸山眞男座談』全9冊(岩波書店)は「座」、『丸山眞男書簡集』全5巻(みすず書房)は「書」、『丸山眞男話文集』全4巻(みすず書房)は「話」、『丸山眞男回顧談』上・下全2巻(岩波書店)は「回」、『自己内対話』(みすず書房)は「自」と略記し、例えば『丸山眞男回顧談』下巻200頁については[回下-200]と略記する。(なお『丸山眞男回顧談』の回顧は1988年4月から94年11月になされている。)

## はじめに

凄惨なる第二次世界大戦を経て、戦後日本に強く影響し続けてきたアメリカ合衆国といかに関わるべきかという問題は、現代日本にとり常に重要な問題であり続けている。この問題に関し、戦中から戦後への変化を見据えた20世紀の代表的知識人、東京

大学法学部教授・丸山眞男(1914～1996)が、アメリカをいかに見ていたかを検討することは、丸山自身の思想の一端を明らかにする意義を有するとともに、日米関係のあり方を考えるに際し、有効な示唆を得るための作業となろう。

丸山のアメリカ観を考察することの有効性は、例

えば丸山が四度の訪米に恵まれた点にある。第一期は、1961年10月から翌年6月までのハーバード大学特別客員教授としての滞在であり、62年10月から翌年6月まではオックスフォード大学を中心にイギリスにも滞在した。第二期は、73年6月の、プリンストン大学とハーバード大学から、それぞれ文学と法学の名誉博士号を受けるための二週間の滞在である。第三期は、75年10月から翌年8月までであり、76年4月まではプリンストン高等学術研究所所員として滞在し、その後はカリフォルニア大学バークレー校特別客員教授として滞在した。第四期は、83年3月から6月までで、この時期もバークレー校特別客員教授としての滞在であった。

以上の訪米によって、丸山の人生が豊かな国際交流を形成したことは、ロバート・N・ベラー氏等の丸山追悼文を収めた『丸山眞男の世界』<sup>1</sup>にうかがわれる。また丸山のアメリカ観については、例えば、戦後、吉田茂が単独講和を目指したのに対して、丸山が平和問題談話会で、全面講和のために奔走したことや、丸山が日本社会の「アメリカニゼーション」をすすめたという評価など、断片的言及は数多くなされている<sup>2</sup>。だが丸山とアメリカとの関係を直接論じた論稿としては、かつては外交官・有馬龍夫氏<sup>3</sup>やハーバード大学外交史教授・入江昭氏<sup>4</sup>の短い回顧録しかなく、2008年によく清水靖久氏による本格的な学術論文「丸山眞男と米国」<sup>5</sup>が発表されたばかりである。この状況には明らかな理由が存在するようである。例えば丸山は、第一期訪米・訪英直後の、64年の論文「国際危機と世論」で、イギリス滞在時のキューバ危機の緊張感について詳細に回顧したが、その起筆に際し、「外国帰りをつかまえては「あちらはいかがでした」と寄って来る間は、まだ日本は鹿鳴館時代を脱しないというのが私の持論なので、見聞記は一切御免蒙っている」と述べ、周囲からの期待にも関わらず、見聞記執筆を拒否するという持論を明記している[集9-186]。また67年の知米家・鶴見俊輔氏との対談「普遍的原理の立場」でも、丸山は、「わたしはもともとアメリカというものをまったく知らなかったし、いまでもアメリカはわからないところだなと思っていま

す。…だから、帰ってきて、一度もアメリカ論を書きません。むずかしいなあって感じですが、アメリカを論ずることは」と、アメリカ理解の困難性を根拠に、アメリカ論執筆の回避を明言している[座7-111]。このような丸山の意味を知る人々は、そのアメリカ観の考察を避けてきたと思われるのである。

かかる状況のなか、有馬氏は、ハーバード大学教授フェアバンク氏の招聘によってハーバードに滞在した丸山が、そのユーモラスな人柄、繊細な感覚、真摯な学問姿勢によって敬愛的になったことを紹介している。また入江氏は、61年の訪米以来、入江氏と親交を持った丸山が、アメリカの学界、社会、文化を評価する一方で、原爆投下の非を認めないアメリカの政府や外交政策を厳しく批判したことなどを回顧している。清水靖久氏は、丸山が、リベラルの追求において「他者を他者として理解」していたことを重視し、アメリカを重要な他者と見なしていたことに注目する。特に清水氏は、丸山の訪米に際し、アメリカからビザが容易に発給されなかった事情を精査し、この背景に、丸山のレッドパージ批判や米国外交政策批判があったことを論じている。しかし清水氏は、丸山の来歴の詮索に関する躊躇を明記して、丸山の第三期以降の訪米について検討を保留しており、丸山のアメリカ観の全体像を見渡した研究は未だに存在しない。そこで本稿では、丸山のアメリカ観の全体像を理解すべく、丸山の生涯にわたるアメリカ観の展開について概観し、その特質を明らかにしていきたい。

## 1 戦前・戦中における丸山のアメリカ観

### 1.1 戦前における日米隔絶の記憶

丸山は、出生時から、アメリカ理解について、極めて恵まれた家庭環境にあった。1914年の丸山の出生時に、大阪朝日新聞の通信部長を務めていた丸山の父・幹治が渡米したことは、それを如実に示した。85年に丸山は、「私は…早産だったそうです。母が外遊の荷作りをしたわけですが、その当時の外遊の荷づくりというのは大変でしょう。忙しく体を動かし過ぎたものだから、お腹から予定よりかなり早く飛び出しちゃった」と回顧し、自身の早産の

原因が、幹治の渡米準備のための母親の疲労にあったと説明する [集 16 - 150]。丸山は、幹治について、「ニューヨーク特派員だったこともあって、親米」と評している [回下 - 12]。しかし丸山が、この父親の影響によって記憶に刻印したのは、「英米」の区別と、イギリスとの対比による、戦前日本に対するアメリカの影響力の小ささであった。その理由は親米派の幹治が、親英を苦々しく見つつも、親英政治家を代表する牧野伸顕と親しくしていたからである [回下 - 10・37]。丸山は、①一般に「重臣リベラリズム」と呼ばれる西園寺公望や牧野伸顕などが、戦前の実際の呼称では、「親英米派」「国際協調主義」と呼ばれており、「重臣リベラリズム」「平和主義」という呼称はふさわしくないこと、②親英米派は、立憲君主制派としてイギリスをモデルにしており、共和制やデモクラシーを特徴とするアメリカを問題にしていなかったこと、③太平洋戦争開戦日まで「英米」といわれていた呼称が、その日を境に、それまで不自然であった「米英」という呼称に変化したことなどを回顧しながら、戦前の日英の親近性、及び日米の隔絶性について言及する [回下 - 4 ~ 13]。さらに丸山は、「親米派がみんな反時局的か」というと、必ずしもそうではない。たとえば松岡洋右は明らかに親米派で、彼は大衆扇動政治家です。ナチに近いような新しいタイプ」と述べ、松岡洋右を例に、親米派がファシズムと結合し得たことに注意を促している [回下 - 38]。

丸山は、戦前の日米の隔絶を晩年まで記憶している。最後の訪米を経た丸山は、84年、「福沢諭吉と新渡戸稲造」と題されたシンポジウムで、自身の若き日のアメリカ認識を回顧している [座 9 - 307 ~ 308]。「むすび」でも述べるように、この回顧は、丸山のアメリカ観を総括するものだが、そこで丸山は、当時の日本人は、「太平洋の向こうのアメリカ」を間近に感じているが、それは「戦後のイメージを歴史に投影」したものであり、「戦前の頃まで、日米間というのは非常に遠い」ものであったと力説する。その具体例として丸山は、①アメリカが日本を「Far East」と呼ぶように、日本にとりアメリカは「Far West」であること、②西洋とは言っても、ヨー

ロッパとアメリカとは区別すべきであり、自身も学校でアメリカに関して学ばなかったこと、③ペリー来航が太平洋側ではなく西側経由であったことを挙げる。さらに、「3.1」でも後述するような、鶴見氏との対談「普遍的原理の立場」における、鶴見氏の「欧米」という発言に違和感を覚えたことについて言及し、「ヨーロッパに対して日本は、既成知識とともに一種の親しみがある。長い伝統を持ち、理想的に近代化した。日本もいろいろいきさつはありますが、高度な伝統文化がありそうして近代化したというひとつの共通点があります。ところがアメリカはいわば何もないところに近代社会ができたわけです。その意味でも、ヨーロッパとアメリカとの異質性は考えておきたい。日本はヨーロッパに対し、明治以来百年以上それを学習してきましたが、アメリカに対しては割にそれは薄い」と述べ、日本とヨーロッパが伝統文化を基盤にしなが近代化した点が共通するのに対し、伝統文化を持たずに近代化したアメリカが、戦前の日本にあまり影響しなかったことを強調する。そして丸山自身、大学三年まで「私などはアメリカについては映画のギャングや巨大金融資本程度のイメージしか」なかったというのである [座 9 - 307 ~ 308]。「巨大金融資本」に関して、36年に丸山は、学生時代の論文「政治学に於ける国家の概念」で、「独占資本の寡頭支配」として表れた資本主義を、「政治的・経済的民主化傾向」とは調和しえない、近代の弊害を示すものと把握していた [集 1 - 23]。

## 1.2 ファシズムの席捲とアメリカ民主主義の再評価

しかし丸山は、ドイツや日本におけるファシズムの席捲や日米関係の悪化を目の当たりにし、アメリカの民主主義という側面に注目せざるを得なくなる。かかる変化について丸山は、前述の67年の対談「普遍的原理の立場」で、「常識として、わたしたちはすでに三〇年代において、とくにアメリカ恐慌以後は、いわゆる、ブルジョア民主主義というものに対する批判とか懐疑とか、そっちのほうをさんざん注ぎこまれていたわけだから、わたしたちの精神史から言えば、なだれを打った転向の時代にか

えって、ブルジョア民主主義とか自由主義とかいうものを見直した、というか再認識したといったほうが正しいんです」[座7-109]と回顧している。アメリカの資本主義が、30年代に、世界恐慌でその弊害を暴露したにも関わらず、日本国内の思想統制で多くの人々が転向するなかで、丸山の場合は、資本主義と一体であるはずのブルジョア民主主義を再評価するようになったのである。

37年に東京帝国大学法学部を卒業し、同学部の助手に就任していた丸山は、38年の学界紹介論文で「英米の政治学界がイデオロギーの多彩な葛藤を比較的忠実に反映しているに対し、独逸のそれはただ一色である」と述べ、ファシズムが深刻化するドイツに危惧を示すとともに、英米に関しては、多様な議論が存在しているとして評価している[集1-82]。日米開戦までの欧米研究の紹介は、当時の丸山にとって重要な課題であった。後年丸山は、開戦直前まで、英米の本が「最後まで来ていました」と回顧している[回下-200]。79年に丸山は、太平洋戦争開戦によって、アメリカ映画が敵国文化として上映を禁止される直前について回顧し、『スミス氏都へ行く』でリンカーンのゲティスバーグ演説が朗唱される場面を見て泣いたと告白している。「この瞬間、不覚にも私の目は涙にあふれた。何というセンチメンタリズムかとわらわられても仕方がない。この場面で私は映画の主人公とともに泣いたのは事実なのだから……。日本をふくむ枢軸ファシズムの世界的な高まりのなかで、「……地上より消え去ることなかるべし」というあのフレーズは、さながら満目荒涼とした原野をふきすさぶ嵐に揺らぎながら立っている一本の樹のように映った」[集11-25~26]と回顧するのである。丸山は、日本やドイツのファシズムを悲嘆しつつ、アメリカにおける、民主主義を永続させる理念の意義を再認識していたのであった。

### 1.3 戦中期のアメリカ観

日米開戦について、丸山は、「今から言うとおかしいけれど」と遠慮気味に述べながらも、自身は「絶対戦うべからずという派」であったと回顧している。

しかし丸山は、当時の大多数の人々が、戦争は不可避だが、「勝つとは思わなかった。さりとて負けるとも思わなかった」と考えており、ハル・ノートの強硬的な内容上、戦争不可避視が、当時の「普通のリアリズム」であったと述べている[回下-152~158]。丸山は、デモクラシーを掲げる英米に正義があると考えていたが、超国家主義に反対して自分の信念を維持するのは困難であった。丸山は、自身と同じ考えだった岡義武氏が、「周りがみんな気違いと思わなければ、自分の考えているのは正しいという確信が持てない。…われわれのほうがおかしいんじゃないかね」と、非常に真面目につぶやいたことを回顧している[回下-73]。かかる状況のなか、丸山は、戦争の長期化を嫌悪し続けた。後年丸山は、44年に、和辻哲郎氏が、「アメリカの国民性」という論文で、「強く見えるやつは意外に弱い」と、アメリカを過小評価したことを、「ギリギリのときになって、まだそういうことを言っている」「あれはひどい」と回顧している[回上-296]。

丸山は、戦中期でも、アメリカに関する特殊な情報を入手していた。45年に丸山は、太平洋問題調査会に属した鶴見祐輔を父とする鶴見和子氏から、太平洋問題調査会の戦後処理会議で、ラティモアを中心とする中国派が、天皇制廃止を主張していたのに対し、元駐日米大使であるジョセフ・グルーやライシャワーなど日本派が、天皇制廃止の反動を恐れていたという情報を入手している[回下-22]。また『丸山眞男戦中備忘録』<sup>6</sup>の存在は、陸軍情報班の一員として、丸山が、日々、詳細な国際情報を入手していたことを示している。

## 2 終戦後における丸山のアメリカ観

### 2.1 終戦直後のアメリカ観

59年の論文「開国」のように、後年、日本思想史上の「開国」の意味に注目することになる丸山は、敗戦を、日本史上の「第三の開国」として重要視することになる[集9-162]。この「第三の開国」に関して丸山は、召集された自身が、終戦直前に、日本に基本的人権の尊重や、言論・宗教・思想の自由を要求するポツダム宣言の情報を入手し感動したと

いう。そして原爆投下によって、広島の子供で被爆したものの、敗戦について「日本の敗北を自分のこととして悲しむ気持ちになれなかった。…“やっと救われた”という気持ち、ワーッと思いきりのびをした気持ち」だったと回顧している [座3-298]。

89年に丸山は、終戦直後のアメリカの占領政策について総括的に回顧している。この回顧で丸山は、アメリカの占領政策には「予想の外にある出来事」があったと述べる。治安維持法などの思想取締法や特高警察の廃止と、政治犯の即時釈放である [集15-33]。共産党を許容する政策に驚愕したのは、前述のように、丸山が、アメリカに関して、資本主義の側面を重視してきたからであった。敗戦直後の丸山は、三井物産から応召されて不安を懐いていた将校に対し、「三井は大丈夫だな。アメリカは財閥の国だから」と励ましていたという [回上-8]。丸山は、資本主義を、近代の弊害を示すものと把握しており、丸山が46年初の論稿「近代的思惟」で述べたように、戦中、丸山を含む日本の知識人は、近代の「超克」を目指していたのである。しかし丸山は、終戦時の日本について、「ダグラス・マッカーサー元帥から近代文明ABCの手ほどきを受けている現代日本」、「今やとっくに超克された筈の民主主義理念の「世界史的」勝利を前に戸迷いしている」、「我が国に於て近代的思惟は「超克」どころか、真に獲得されたことがない」と述べ、改めて「近代的思惟」の究明を目指すことになる [集3-5]。

とはいえ丸山は、アメリカの占領政策やブルジョア民主主義を完全に評価していたわけではない。実際に、前述のように、丸山は、鶴見氏との対談で、一方では、早くも30年代に、ブルジョア民主主義を見直していたにも関わらず、他方で、「戦後にはすでにブルジョア自由主義にただ一辺倒になるには、あまりにスレッカラシになった」と回顧している [座7-109~110]。そして、この態度には、世間の趨勢に抵抗する福澤諭吉の「アマノジャク精神」と、「きのう言ったことと無関係に急に変わったことは言いたくないという気持ち」 [座7-103] という転向に対する拒否感が反映していたという。

89年でも丸山は、「当時の解放感を味わった人は

…GHQ そのものに対して甘かったわけではない。むしろ、総司令部にたいして告げ口するような日本人にたいして嫌悪感を持っていた」と回顧し、アメリカによる国辱的な占領政策を批判的に振り返っている。例えば、戦後の混乱期、日本人用の電車本数が減って混雑していた時期に、占領軍は、ガラ空きの占領軍専用電車で「パンパン（即席娼婦）」を載せるのを見せつけ、日本人に敗北意識を植えつけたという [集15-59~60]。一千万人が餓死すると予測された46年の食糧難についても、丸山は「それを放置していたら占領軍の不名誉だから、アメリカは必ず食糧を放出する。ただし、戦争がどんなに惨めなものかを、戦争を謳歌していた日本の国民にとことんまで知らせなければいけない。そんなにたやすくは出さない」と予測し、「そのとおりになった」という [回下-131]。新憲法に関しても国辱感を味わった。丸山は、人民主権を明記したマッカーサー憲法草案第一条について、「もしイギリスが日本を占領したとしたら、ああいう第一条は出てこないですね。イギリスは主権論なんていう議論は嫌いだから。アメリカはアメリカ憲法の由来があるから、非常にはっきり人民主権を問題にする」と、一面ではアメリカの影響を評価しながらも、『タイム』が、日本国憲法について、「イット・カント・ビー・ヘルプド・デモクラシー」「負けたからしょうがないデモクラシー」と表現したことに国辱感を味わったことを回顧している [回上-301~305]。

戦後間もないころから、丸山自身がアメリカに「甘くなかった」ことは、46年のハーバード大学教授ラスキ著『信仰・理性及び文明』の書評に表れている。丸山は、「連合国の勝利が直ちに自由と解放を意味しないことは第一次世界大戦の深刻な経験によって明白である」、「ウィルソンの Fourteen Points の遭遇した運命からして」、「大西洋憲章やいわゆる「四つの自由」の雄弁な約束が安心ならない」、「アメリカでは…世界恐慌に於て、アメリカが land of promise たることを止めてその地盤が旧世界のそれとなんら異ならぬ事が暴露された」と述べ、第一次世界大戦後の世界恐慌などの弊害に準えながら、第二次大戦後の連合国の勝利に懸念を示していた [集

3-44～45]。

## 2.2 冷戦の激化とアメリカ観

実際に、アメリカの占領政策は、冷戦の激化に伴って変化する。51年の「戦後日本のナショナリズムの一般的考察」において丸山は、アメリカの占領政策が、米ソ冷戦に伴って変化し、その端緒が47年2月のゼネスト中止命令にあらわれたことなどを回顧している[集5-108～111]。また89年でも丸山は、二・一ゼネスト弾圧について言及しつつ、「逆コース」が①47年のトルーマン・ドクトリンによる全世界からの共産主義締め出し、②50年年頭のマッカーサーの自衛隊容認声明、③50年6月の朝鮮戦争勃発、の段階を経ながら展開したと回顧している[集15-57～58]。

丸山の当時の発言も、逆コースとほぼ並行しながら変化する。例えば丸山は、48年の時点では、日本の軍人勅諭の「上官の命令は陛下の命令である」という規定と、アメリカの軍隊内務令の「上官の合法的命令には服従の義務あり」という規定とを比較し、アメリカにおける客観的価値の独立の存在を、その長所として評価しながら、日本人の権威信仰を「病理現象」として批判していた[集3-327]。

しかし50年6月に朝鮮戦争が勃発すると、同年9月には「八・一五以前に直接連なる諸勢力は…「英米的」民主主義の防衛の名において復活強化されて行く」と、アメリカ民主主義に伴う欺瞞性を指摘しながら、その影響下での日本の再軍備を批判する[集4-330]。また平和問題談話会で活躍する丸山は、会の声明文「三たび平和について」を9月に発表、『世界』12月号に掲載し、第二次世界大戦後のアメリカのマーシャル・プランなどによる復興への寄与を認めながらも、核戦争を特徴とする第三次世界大戦が勃発した場合、アメリカはもはや勝者になり得ないと警告する[集5-9]。また平和問題談話会で、米ソの平和共存を不可能と見なす和辻哲郎氏から「そんなにソ連で信用できますか」と問われた丸山は、「それじゃ、アメリカは信用できますか」と反論している[回上-294]。

丸山は、平和問題談話会での活躍によってリード

ページの危機に陥る。丸山は、「レッドパージそのものについては、ぼくらには感慨無量でしたね。…アカといえば、戦前戦中と同じじゃないかと。それほどGHQの占領方針の変化は急激だったのですね」と回顧している[回下-91～92]。

51年からは、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約との「抱き合わせ」に関して問題点を指摘し始める。丸山は、向米一辺倒的単独講和が、ソ連や中国を仮想敵国としていることを問題視する。そして日本政府がダレスの活動を高く評価することについて、「アメリカが自国のインテレストをさしおいて、日本の為に計ってくれるかのように考えて、感謝感激するのは滑稽を通りこして悲惨というほかない」と、アメリカが自国の国益を重視していることに注意を促している[集5-82～84]。

52年に一冊の著書として刊行した『政治の世界』でも、丸山は、マックス・ヴェーバーに依拠して、アメリカの権威の変化について危惧を示す。かつてのアメリカの権威は、アメリカ憲法によって維持されてきたが、大衆デモクラシーが勃興した後は、指導者のカリスマが大きな意味を持つようになり、フランクリン＝ルーズベルトやアイゼンハワーはこのような状況で注目を集めるようになったと説明する[集5-153～158]。そしてアメリカですら「ニューディール以来、大統領及びそれに直属する官僚の実質的な権限の急激な膨張として現れ、伝統的な三権分立制も影が薄くなって来」たというのである[集5-164～166]。またアメリカ大衆についても「大衆がますます政治的に受動的になって、強力な指導者を待望し、その指導者に万事お預けにするという傾向が強くなっている」として危惧し、「将来の打開の方向を真剣に考えて行かなければならない」と提言する[集5-184～185]。これに関して丸山は、ラスキに依拠して、アメリカ民主政は、巨大ジャーナリズムによって意見を画一化されやすいという危険性を指摘するとともに、宗教団体、婦人団体、教育団体などの自主的組織の抵抗が、「民主政の健全性を維持する」という期待を示している[集5-189～190]。

同年の「[現実]主義の陥穽」の論稿でも、日本

の「現実」主義が、権力への従属という傾向を帯びていることを指弾しつつ、アメリカの問題点について言及する。第一には、ヨーロッパにおけるアメリカへの反発である。丸山は、日本では、「力による平和」という考え方を、西欧諸国の自明の原理のように誤解しているが、当時のフランス民衆の75パーセントはアメリカへの加担に不満を有しており、イギリス人も、アメリカ人が生活水準を上昇させ続けているにも関わらず、イギリス人に対しては生活水準を切り下げようとする要求していることに不満を募らせていると指摘する。第二には、文官優越制による戦争の助長である。丸山は、アメリカが、日本に防衛力漸増の義務を負わせようとしていることは、サンフランシスコ会議のトルーマン大統領演説で明言されており、またマッカーサー罷免に表れた文官優越制は、マーシャル・ブラッドレー派の勝利であって、これにより国防省の発言権が強化されたと論じる。これを事例に丸山は、文官優越制は、最も有効な戦争指導体制であると説明し、文官優越制が、戦争の危険を減少させると考えることを、「現代戦争の動因に対する完全な認識不足」と批判するのである [集5-198~204]。

### 2.3 マッカーシズム批判

84年に丸山は、自身の研究について、日本政治思想史を「本来の場」、時事的な政治学研究を、「本来の場」ではない「夜店」と呼んでいる [集12-109~111]。後に、その「夜店」の集大成『現代政治の思想と行動』にも収められることになる52年の「ファシズムの諸問題」は、マッカーシズムに焦点を当てた初の本格的なアメリカ論である。丸山は、マッカーシズムが、「自由の国」の自由を圧殺しつつあることを指摘する [集5-255~256]。すでに、丸山は、52年のラングストン・ヒューズ編「ことごとくの声あげて歌え」の紹介において、「人種問題が現代デモクラシーのアキレス腱となっている」 [集5-247] と述べていた。このように人種問題をアメリカ民主主義の欠陥として指摘していた丸山は、49年のピークスビル事件（平和運動家黒人歌手ポール・ロブソンのコンサートに対する組織的

暴行）の黒人迫害や、赤狩りに関して、小市民が動員されたことを根拠に、マッカーシズムと、ドイツやイタリアのファシズムとの共通性を指摘する [集5-268]。その上で丸山は、トクヴィルの「アメリカほど真の精神の独立と討議の自由が少ない国を知らない」という記述を紹介し [集5-263]、「マス・メディアが大事業の手にしっかりと握られているアメリカ」のファシズムには、「政府の最高の役職がますます職業軍人と投資銀行家たちの手に吸い寄せられ」る傾向や「ブルジョア階級自らの軍国主義化」という資本主義に伴う独自の特徴があると説明する [集5-270~272]。

マッカーシズムに対する批判は、53年の「ファシズムの現代的状況」でも続けられる。丸山は、ファシズムは「英・米のような先進国には、原則的に起こり得ない」という考えを批判する。本来、アメリカの自由民主主義は、独立宣言やジェファソンやリンカーンの伝統が示すように、人民が圧政に抗する最終的手段として革命権を肯定し、少数意見による批判を、進歩の原動力として積極的に歓迎していた。しかし当時のアメリカでは、忠誠審査法の制定によって「権力による強制的同質化」がなされ、「大声をあげて俺は反共だと怒鳴らないと完全に安全ではない」ようになったと指摘する。かかる「国民のマス化」に対し、丸山は、「デモクラシーとは、素人が専門家を批判することの必要と意義を認めることの上に成立しているもの」だという自覚を呼びかける [集5-300~316]。

また、戦後のテクノロジーの発達に注目していた丸山は、同年の「現代文明と政治の動向」において、朝鮮戦争に関するアメリカの戦況予測が、テクノロジーの発達によって、むしろ困難に陥っていることや、ベトナムのパオダイ政権の援助に見られるように、アジア民族運動に対するアメリカ外交政策が失敗していることを指摘した [集6-21~22・44~62]。

その後も丸山は、①57年には、マッカーシズムがテレビというテクノロジーを利用したものであること [集7-186]、②58年には、マッカーシズムが、組織力の強い労働組合ではなく、分裂して

抵抗力が弱いインテリ組織を集中攻撃したこと [集 7-314]、③ 61 年には、ナチスの迫害を避けてアメリカに亡命したトーマス・マンやチャップリンが、マッカーシズムを避けてアメリカから去ったことが、ファシズムとマッカーシズムとの共通性を示していること [集 9-33] など、後年までその弊害を指摘し続ける。このマッカーシズム批判には、『日本における近代国家の成立』の著者であり、戦前から丸山との交友があったカナダ人研究者ハーバート・ノーマンが自殺に追い込まれたことに対する私憤も反映していた。丸山の怒りは大きく、57 年、「E・ハーバート・ノーマンを悼む」を著し、マッカーシズムがノーマンの名誉を甚だしく傷つけたことを厳しく指弾している [集 7-65]。

#### 2.4 アメリカ市民武装の評価と安保闘争

他方で丸山は、日本人の自立を促そうとする際には、アメリカの市民武装を高く評価した。57 年に丸山は、アメリカ合衆国憲法が、良心・信仰・言論の自由を規定した直後で、人民の武器携帯権を規定しているが、アメリカの影響を受けた日本ほど国民が徹底的に武装解除されている国はまれであるとして、これを問題視する。そして丸山は、「私はなにも人民にピストルを配給しろというようなことをいっているのではない」と述べながらも、日米の「法治主義」や「遵法の精神」が、非常に異なることに注意を促す [集 7-139~140]。さらに 60 年 3 月、丸山は、市民の武装について急進化する。「拳銃を……」というコラムで、前述のアメリカ修正憲法第二条や、ナチ占領下のフランス市民の抵抗運動の成果について言及し、「外国軍隊が入って来て乱暴狼藉しても、自衛権のない国民は手を束ねるほかはないという再軍備派の言葉の魔術」を無効にするために、全国の各世帯にピストルを配給すべきだといっているのである [集 8-281]。この執筆から間もない 5 月 19 日、新安保条約が強行採決された。丸山の市民抵抗の期待は、丸山自身が活躍した安保闘争において結実することになる。丸山は、旧安保条約が占領期の締結であったのに対し、新安保条約の方は、日本が、独立国の自由意思によって締結する点で問題

があると見ていた [話 1-50~51]。丸山は 7 月、岸政権に対する猛烈な反対によって、アイゼンハワーが訪日を中止し、アメリカが、新安保条約について「こんなものができて何にもならないじゃないか」と懸念するようになったことを評価している [集 8-331]。丸山は、この評価を 94 年まで維持し続けた。安保闘争直後に野間宏氏が中国に赴いた際に、毛沢東が、日本国民の反戦勢力の大きさを知って安心したことを、丸山は「たいへん大きなこと」と評価している [集 15-341]。

### 3 渡米後における丸山のアメリカ観

#### 3.1 第一期アメリカ滞在

61 年 9 月、丸山はハーバード大学客員教授として渡米の機会を得る。渡米直前の 7 月の、都留重人氏への私信によると、丸山は、58 年からハーバードからの招待を受けていたが、学内の用事や安保反対運動によって延期していたという。また渡米の前から丸山は、国際政治の問題に口を出さずに「思想史の勉強に専念します」と宣言している [書 1-66]。国際政治という時事問題に関わらない決心には、すでに 56 年に「夜店」の集大成『現代政治の思想と行動』を刊行したことが影響していよう。

清水靖久氏は、丸山の渡米背景として、アイゼンハワーからケネディへの政権交代が影響した可能性を指摘しているが、丸山は、そのケネディが相反する両面を有していたことを評している。「ケネディは左手に理想主義の剣を、右手にリアリズム一力の外交—をかざした。その両者が比較的バランスをえていたことは、彼の政治家的資質がアメリカ政界の水準をはるかに抜いていたことを証している」といのである。さらに重要なのは、ケネディの両面性がアメリカ政治独自の特徴であると指摘していることである。続けて丸山は、ケネディについて、「けれどもやはりある時は左手を使いすぎ、ある時は右手を使いすぎた。彼が時折機会主義者と評せられたのは理由なしとはしない」と述べ、さらに「イギリスの政治家は、理想主義と現実主義のこのような使い分けをしない。彼はいつもそれを同時に重ねて使う。イギリス外交がおそろしく状況適合的な柔軟性

を示しながら、そこにいつも一本、筋（原理）が通っているのはそのためである」と、イギリス人政治家との対比によって、アメリカ政治家の二面性の存在自体が特徴的であることを指摘している [自-72～73]。

すでに丸山は、アメリカの多面性を、「近代化」の定義の相違においても実感していた。丸山は、60年、「日本における近代化」に関する日米研究者の共同研究・箱根会議に参加し、日本の研究者が「資本主義」や「ブルジョア民主主義」などの「概念枠組」を導入しようとするのに対し、アメリカの研究者が、ナチ・ドイツや軍国主義日本、当時のデモクラティックではないソ連や中国の工業化を根拠に、「近代化」の「非義一性」や「多義性」を強調していたことを特筆している [集9-377～379]。このことに留意していた丸山は、アメリカ現地で「近代」の多面性を目の当たりにすることになる。

丸山がハーバード到着直後にまず注目したのは、大学の学問状況であった。11月の世良晃志郎氏への私信において丸山は、アメリカにおける日本近代史や現代史研究の勃興が目覚ましいことを指摘して、日本の国立大学の法経学部で日本やアジア関係の講座が少ないことを問題視している [書1-70]。

同月の福田歓一氏への私信でも、「教授との話は一番楽で、自動車の運転手とか商人とかとの日常会話がかたがたも苦が手、この方はヒヤリングも会話も一向進歩しません」と、英会話が進歩しないことを苦にしながらも、アメリカの政治学の教授との会話を楽しんでいると伝えている [書1-72～73]。

12月の家永三郎氏への私信でも、教授や研究者とばかり話して日本料理を食べており、「ヴ・ナロード」（人民と接触すること）になっていないと反省するとともに、アメリカの国情については貴重な伝達をする [書1-75～77]。第一には、限定戦争論への批判視である。丸山は、「ハーバードの中の雰囲気は、はなはだのんびりしていて、その限りでリベラルであり、例の限定戦争論で有名なキッシンジャーなどに対しても、政治学部でさえも私の会った教授の多くは全く批判的でした」と述べている。後にニクソン政権で国務長官を務めることになる

キッシンジャーは、すでにケネディ政権に対し、アイゼンハワーの大量報復戦略を批判しつつも、核兵器の局地的使用による限定戦争論を提言していた。しかし丸山は、大学ではその説が批判されていたとして安堵している。けれども丸山は、第二の点として、アメリカ全体における右翼の大衆的浸透を指摘する。「しかしアメリカ全体として見ると、右翼の大衆的浸透は侮り難いものがあり、例のジョン・バーチ・ソサィティ〔極右団体〕なども地域や職場に細胞や大衆組織をつくって行くやり方において、過去のマッカーシーのような一人のスタンドプレーとちがって決して楽観を許しません」と、マッカーシズムのような個人主導による右傾化から、組織的な右傾化に変化していることに警戒感を示す。前述のように丸山は、自主的組織が、マッカーシズムの弾圧に抵抗していたことを評価していたから、組織的な右傾化についての危惧は大きかったと思われる。とはいえ丸山は、「しかしなにしろ広い国ですから、そういう傾向—マスコミを通じて見たアメリカ—だけから判断できないいろいろ矛盾した側面があり、それが面白いところだと思います」と、広大なアメリカの多様性や矛盾に高い関心を示している。

69年8月5日・6日の『中国新聞』夕刊記事「二十四年目に語る被爆体験」のためのインタビューで丸山は、第一期滞米時の被爆体験談がアメリカ人の耳目を集めたことについて回顧している。丸山は、「アメリカへ行って、原爆に遭った話をする、途端にみんな真剣になりますよね。…相当右翼的な人でも、原爆の話をする、…どんなに強い主張をしても、日本人が、われわれがどんなことを言っても反駁しませんね」 [話1-466～467] などと述べ、①あらゆるアメリカ人が、自身の被爆談に関心をもったこと、②アメリカ人は原爆に共通の罪悪感を抱いており、右翼の人でも原爆問題の主張に反駁しなかったこと、③日本人は義務として、国際社会に対して被爆国民であることをもっと自己主張すべきことを力説している [集16-363]。

なお丸山は、アメリカ滞在を踏まえ、アメリカ理解が困難であるという認識を深めていくことになる。62年2月の岡義武氏への私信で、「学者という

ものは…大体似たようなものですので、これからはもう少し色々な階層の人々と接触の機会を持ちたい」という希望を示しながらも、「アメリカのように文字通り空間的におそろしく大きな国はなおさらのこと、何年居てもどれほど分るものではないという諦めの気持ちがいつも心の底によどんでいることも事実です」と吐露している〔書1-86～87〕。5月の安田武氏への私信でも、中部と南部を旅行してアメリカの広さを実感したことや、世界各国からの移民をアメリカに同化させる「実体」が何かを考察したがわからなかったことを伝え、国土の広大さに裏付けられた多様性と、これらに反する、イデオロギー的画一性を指摘している〔書1-96～97〕。

第一期訪米期を含む、61年から68年までの丸山の著作を収めた〔集9〕について解題を付した松沢弘陽氏は、「最初の外国経験は、丸山が一九五七、五八年頃からとり組んでいた、日本歴史を通じる文化接触と外来思想の受容＝変容という問題の追求をさらに促すにいたった」と述べ、この問題が「古層論へと展開し、72年の「歴史意識の古層」で結実したと解説している〔集9-436～437〕。松沢氏が解説するように、84年に丸山は、自身が日本政治思想史研究で古層論を展開した経緯について、「縦の線」としてのマルクス主義的な歴史的発展段階とともに、「開国」という「文化接触」を、「横の線」として観点に加えたものであると説明している〔集12-112～124〕。

しかし帰国直後の丸山は、同時代のアメリカ認識をあまり明らかにしていない。その第一の理由は、政治学から政治思想史への研究対象の移行であるが、第二の理由は、前述の「普遍的原理の立場」で、丸山が、アメリカ論執筆の回避を明言した際に述べたように、日本やヨーロッパには「過去の遺産」があるが、アメリカには、「理念化」し得る「過去」や「伝統」が存在しないという違和感である〔座7-111〕。丸山は、「ヨーロッパ・アメリカ的というふうにいっしょにと言われるとすぐ、ヨーロッパとアメリカとはまるで違うじゃないかって反発したくなる。わたしが実際に行った感じもそうです。つまりヨーロッパへ行ったときは未知のところへ来た

感じがまったくしなかったが、アメリカはまったく見当がつかない」と述べ、「過去の遺産」によって思想形成できたヨーロッパへの親近感と、それを持たないアメリカに対する違和感を明言するのである。丸山は、この考察を、66年東大の「政治思想講座」における「日本…民族的同質性 (homogeneity) の保持と高度の伝統文化の所有」「その反対の極としてアメリカ…移民が不断に流入し、人種的同質性もなく、国家も人為的である。そこでアメリカという identity を保障するものは、国旗と憲法しかない」という講義にも反映させている<sup>7)</sup>。

ただし、他者を不可解な存在として見る目は、決して消極的なものではない。すでに57年に丸山は、自身が「タコツボ」と呼んだ日本の各組織体のコミュニケーション不足によって、本当のアメリカとは異なるイメージを形成してしまうことに警鐘を鳴らし〔集7-153～155〕、68年には、「コミュニケーションによる進歩を信じ」るために、「国際交流よりも…人格内交流を！」と説いている〔自-252〕。また76年の萩原延壽氏との国際交流に関する対談では、アーネスト・サトウの『一外交官の見た明治維新』を高く評価し、その理由について、「自分たちとまったくちがった何ものかに接している、という感覚がどうしてもあるからして、必死になってその「他なる者」を理解しようとしたから」であると述べて、「相手のことはわからないという自戒心」の意義を説いている〔座7-276〕〔集12-11〕。

第三の理由は、丸山が帰国直後の63年12月に明言したように、丸山にとっての本来のインターナショナルとは、「外来対土着という二分法を根本的に打破」することだからである。丸山は、従来の「インターナショナル」について、「外国に行くチョロクいかれる」、「コンプレックス・ナショナリズム」と批判し、これを克服するために、「アメリカだってヨーロッパだっていい」「世界の毒を…吸って自分の抵抗力を強くしなければならない」と提言する。そして丸山は、内村鑑三の「隣の八さん熊さんが人類なのだ」という発言や、福澤諭吉の「理のためにはアフリカの黒奴にも恐入り、道のためにはイギリス・アメリカの軍艦をも恐れず」という丸山自身

が「一番好きな言葉」を根拠にし、「普通の人間として隣人を愛する」ような「本当のナショナリズム」「インターナショナル」を養うべきだと力説するのである[集9-138~140]。このような「隣人を愛する」ことの重視は、64年の丸山が、「複数の「近代化」」を前提にしつつ、「近代化」について、「人間は人間として生まれたことに価値があり、…そうした個性の究極的価値という考え方に立って、政治・社会のもろもろの運動・制度を、それを目安にして批判していくこと」[集16-54・60]と規定したことと共通するものであった。また「外来対土着という二分法」の「打破」は、前述のような「「あちらはどうかでしたか」と寄って来る間は、まだ日本は鹿鳴館時代を脱しない」という批判と共通する。丸山は、この「鹿鳴館時代」の欠陥を、65年の佐久間象山論で規定している。その第一は、アジア、アフリカ、中南米を軽視した明治以来の「欧米中心」であり、第二には、象山が「追々埒もなく成り候」と述べたような当時の欧米の欠陥的側面を学ぶことである。特に第二の点に関連して、丸山は、自身が、「歴史的な欧米文化の中にある普遍的な価値を認めることにおいて私は人後に落ちぬつもりです」(傍点原著)と明言しながらも、軍備が万能であった帝国主義時代が終焉を迎えた当時においては、巨大な軍備を有するアメリカは、世界の尊敬を得ておらず、また植民地や発展途上地域の独立運動をつぶそうとして失敗していると批判している[集9-248~250]。

この発言の背景には、ベトナムを中心に深刻化するアメリカの軍備増強があった。「社会の普遍的問題」に対する「異議申立て」を「知識層の役割」として規定し、その事例として、「アメリカにおけるヴェトナム反戦指導」を掲げていた丸山は[自-152]、65年以降のベトナム反戦運動に参加し、65年の「憲法第九条をめぐる若干の考察」において、53年に当時副大統領として来日したニクソンが「戦争放棄条項を日本の憲法のなかに挿入させたのはアメリカの誤りであった」と述べたことや[集9-254]、アイゼンハワーが「軍事・産業体の複合組織」の危険性を指摘したこと[集9-282]などに触れ

ながら、米ソ核開発の危険性について詳述し、これとの対比によって平和を掲げた憲法第九条の存在意義を説いている[集9-284]。また68年の司法修習生との座談会でも、世界の政治状況には「盾の両面」があるとして、敢えてベトナム戦争を事例に持ちだし、①アメリカ国内の世論、②反戦運動、③アメリカ資本主義の合理的思考など、多様な要素が作用して、戦争を推進している側面と、戦争をエスカレートさせない側面が存在することを指摘している[集16-107]。

なお69年に、丸山は、全共闘学生の対応に苦慮することになるが、その最中に丸山は、第一期の訪米訪欧によって、「知識人の International Community」が成立していたことを認識し感動することになる。69年5月、丸山は、オックスフォード在住の萩原延壽氏が、その私信で、オックスフォードの研究者が丸山を心配していることや、「人間的な感覚は外国の友人の方により多く残っている」、「これらの人の友情に胸が熱くなり、知識人の International Community の存在を感じる」と書き送ったことについて、「この憂うつな日々には、やはり慰めとなる便りだ」と記録し、また丸山のハーバード大学の名誉博士号辞退に関する、フェアバンク氏からの、「あなたに名誉を与えることによってわれわれ自身を名誉づけようと思ったのに」という来信について、丸山は「虚栄といわばいうがよい、こうした国際的友情には涙ぐまずにいられない」と感激を記録している[自-130]。

### 3.2 第二期アメリカ滞在

70年に丸山は、在米中の三谷太一郎氏への私信において、「色々な階層や人種の人と直接にコンタクトする機会を利用されたいと思います。…アメリカのもつ多様で複雑な諸側面を、急激に変貌するアメリカと変貌しないアメリカとを同時的にとらえて来ていたゞきたいと期待します」と、アメリカの多様性に関心を示すとともに、「おそろしく変わった」アメリカを見たいと、三谷氏に対する羨望を記している。このように丸山は、70年代でも、アメリカに対する関心を維持していた[書1-212]。

71年に、定年を前に東京大学法学部教授を辞職していた丸山は、73年6月、ハーバード大学とプリンストン大学から名誉博士号を受けるために、二週間だけアメリカに滞在している。この第二期訪米については清水氏の論文に詳しい。清水氏は、丸山の第一期と第二期の訪米時にビザが容易に発行されなかった事情に注目し、丸山のレッドパージ反対や米国外交政策批判が、その理由であったと推測している。後に丸山は、①この訪米時に、前駐日大使ライシャワーに招待されて、ビザが発行されなかった事情を伝えたところ、当事者でもあるライシャワーから苦笑されたことや、②プリンストン大学の学位授与式で、当時の財務長官にも学位が授与された際に、ベトナム戦争反対の意思表示として、20人の学生たちが背を向けたことなどを、印象深く回顧している[回下ー262～265]。また丸山は、自身への博士号の授与を、官僚や親米学者に対するアメリカ学界の独立性を示すものとして評価した。丸山は、「私には過ぎた名誉ですが、日本の外務省やいわゆる親米派学者にはいささかショックだった、という話を仄聞して正直のところ一寸痛快という気がしております」と言い残している[書1ー293]。

### 3.3 第三期アメリカ滞在

丸山は、人々からベトナム戦争後の世界に関する見解を期待されていた。例えば後年の84年、川口重雄氏への私信で丸山は、「そもそも私という一研究者（預言者ではありません！）にたいする過剰期待があることは前から分っていたのですが…私が「ベトナム以後の世界がどこへ行くのか」自信がない、といったのは正直に事実を言ったままで、「韜晦」とはちがいます。分らないのに分かったような言葉を吐く方がおかしいでしょう。私は歴史的両義性（プラスにもマイナスにも働く要素）にもともと非常に興味をもっており、「古層」もそうした観点から書かれております」[書3ー199]と、自身に対する期待に困惑しながらも、「歴史的両義性」への興味を明言している。そして丸山が三度目に訪米した75年のアメリカには、まさにその「歴史的両義性」が顕著にあらわれていた。清水氏が検討を保留した

丸山の第三期訪米を、そのアメリカ観を考える上で見落とせない理由はこの点にある。

丸山は、プリンストンを訪れた75年のアメリカの状況を、「ポスト・ヴェトナム」「ポスト・ウォーターゲート」と表現し、ベトナム戦争の敗北とニクソン大統領辞任による挫折の影響が色濃くあらわれていることに注目している[書2ー93]。さらに丸山は、木下順二氏への私信で、「アメリカは、文化的多様性の背景もあって、一言では処置なしの思い上りとエゴセントリズムがありながら、他方ではまさに仮借なき内発的告発があり、その両極の生み出すダイナミズムがこの国の面白いところです」と述べるように、「エゴセントリズム」と対峙する「仮借なき内発的告発」の出現を、この時期の顕著なアメリカの特質として関心を示している[書2ー105]。

また丸山は、「ポスト・ヴェトナム」の具体相として、思想界が、①思春期の左翼、②ベトナム戦争以後シニカルになった正統リベラル、③イデオロギーと関係ないユダヤ人勢力によって特徴付けられていると説明している[書2ー78]。思春期の左翼とは、①若い左翼系の研究者が増加している状況や、②極左セクトが数多く存在する状況、③60年代初頭のハーバードとは異なりプリンストンの生協書籍部にマルクスやレーニン以外の左翼系思想家の書籍が数多く並んでいる状況などを指しており、この光景が、「アメリカの挫折感と混迷」の深さを示していると述べている[書2ー84・88]。また丸山は、新左翼系の若い研究者の活躍によって、ハーバート・ノーマンの名誉が回復されていることを高く評価する[書2ー69]。正統リベラルがシニカルであるという状況は、建国二百年祭にも関わらず愛国心が盛り上がり上がらない状況に表れている。他方で政界では、不況の深刻化で右寄りの傾向が現れ、当時の大統領選挙でも、過去に例がないぐらい共和・民主両党の区別がないと指摘している[書2ー84・89]。ユダヤ人の強勢は新聞などに表れている。丸山は、アメリカの新聞は偏向が少ないと評価しながらも、「ただしユダヤ人問題だけは別。東部に十年以上ぶりで住んでみて、あらためて、学界、芸能界、ジャーナ

リズムにおけるユダヤ人のおそるべき勢力を肌で感じました」と特筆している [書2-84]。

丸山は、76年5月からはカリフォルニア大学パークレー校に移動する。丸山は、ロサンゼルスを中心に、ユニヴァーサル撮影所やディズニーランドを観光している。そして①ロスには車がないと処置なしの巨大都市であること、②ニューヨークとは異なり、大ビル街は人通りがなく昼間からゴースタウンであること、③ディズニーによる遊園地の案出は天才的であること、④観光ガイドがルーティンの仕事を生き生きとした表情で行うプロ根性は評価すべきものであることなどについて感想を伝えている [書2-106]。またパークレー校に着いて、即座に、「ブラック」が東に比べて著しく少ない反面、スペイン系、日本人、東アジア人が圧倒的に多いという、人種構成の相違に留意している [書2-113]。

パークレー滞在期の政治状況として丸山が目にしたのは、カーターの民主党大統領候補受諾演説である。丸山は、カーターによる「アメリカ民主主義の精神的価値の過剰強調」について触れ、これを「Watergateにおいて極致に達した権力リアリズムの陶酔への「反動」と説明する。そして丸山は、カーター自身には好感は湧かないが、政治家の発言としては「まし」だったと評価している [書2-129]。

### 3.4 第四期アメリカ滞在

丸山は83年3月から再びパークレーに滞在する。当時のパークレー校は高い評価を得ていた。丸山は、この年1月の全米大学院学生と教授の人気投票で、パークレーが東部のアイビー・リーグを抜いて第一位になったことを記し、アメリカの大学として、ハーバードやイエールを連想することを「十年以上おくれた頭」と批判している [書3-139-140]。また丸山が当時のアメリカの知的雰囲気として気づいたのが、その年に没後100年を迎えていたマルクスについて、「日本よりもマルクスへの関心が高らかに高いこと」 [書3-137] や、地方新聞紙の質の向上であった [書3-140]。政治状況に関して言及するのは、大統領としてすでに一期を務め、新冷戦を深刻化させていたレーガンである。丸山は、パー

クレーが、元カリフォルニア知事であるレーガンの膝元であるにも関わらず、ラジカルな人々が多いこの大学は、レーガンを支持しておらず、このパークレーの存在が、レーガンを怒らせて、サン・ディエゴに、レーガンにとっての「理想的」な大学を新たに作らせることになったとして評価している。またカトリック教会の集会が、断固たる態度で、核凍結を裁決したことに注目し、宗教者や神学者の平和運動に対する貢献に「感服」したことを伝えている [書3-140・145・152]。

他方で丸山は、日米間のギャップが非常に大きく、アメリカの日本に対する過大評価が蔓延しているとして警戒感を示している。日本に対する過大評価とは、①アメリカの学力や経済力の低下との相違を示す日本の詰めこみ教育や、②自主防衛に対する期待である。この過大評価について丸山は、安保以来、アメリカと接触した日本人に責任があると述べ、日本に対するアメリカのイメージが突如崩れるときに来ることに危機感を示している [書3-145-146]。後の、日米経済摩擦に伴う「ジャパン・バッシング」は、丸山の懸念が現実化したものであったといえる。

### むすび

丸山は、1983年のアメリカ滞在を最後として、その後はアメリカに赴くことはなかった。しかしすでに79年の時点で、「私もハーバードなりオックスフォードなり、あるいはプリンストンの研究所なりでかなり長く暮しました」と回顧し [集11-132]、その滞在に満足していた。

しかし丸山は、アメリカと接触する機会に恵まれながらも、日米が隔絶していた時代を忘れなかった。前述のように、最後の訪米後の84年でも、丸山は、シンポジウム「福沢諭吉と新渡戸稲造」で、伝統文化を持たずに近代化したアメリカが、戦前の日本にあまり影響しなかったことを強調する。

以上、丸山のアメリカ観について見てきた。戦前から戦後への変化を見据え、戦後を「第三の開国」として把握し、四度の訪米を経験した丸山にとって、アメリカは重要な関心対象であった。丸山は、父親

の影響などにより、戦前のアメリカの影響力の小ささを記憶しており、これが戦後のアメリカ偏重批判の基盤であり続けた。また丸山のアメリカ認識の指標は、「ブルジョア民主主義」であった。戦前に「近代の超克」を目指していた丸山は、世界恐慌を理由にブルジョア民主主義を否定的に見ていたものの、ファシズムの深刻化と、これに伴う人々の転向に反発し、ブルジョア民主主義を再評価することになる。しかし戦後に、ブルジョア民主主義は、冷戦に伴う日本の再軍備やアメリカ国内のマッカーシズムによって欠陥を露呈するに至る。丸山は、時事的な政治学研究を、「夜店」と呼びながらも、ブルジョア民主主義に伴う諸問題を、政治学の対象として論じ続けた。その後、56年に「夜店」の集大成『現代政治の思想と行動』を刊行した丸山は、訪米後、周囲の期待にも関わらず、直接的なアメリカ論を展開しなかった。しかしアメリカ論の回避にも、丸山独自の根柢があった。第一には、「過去の遺産」を持たずに近代化したというアメリカに対する違和感であり、この違和感は、イギリス産業革命、アメリカ独立革命、フランス革命などの連続性を重視する環大西洋革命論に再検討をせまるものである。第二には、インターナショナルイズムの構築である。丸山はそのために、①「タコツボ」によって、本物と離れたアメリカのイメージを形成することを警戒し、②他者はわからないという自戒心や「自己内対話」を重視し、③「鹿鳴館時代」の欧米偏重を批判した。しかしアメリカには、丸山が訪米の魅力を感じ続けたような、リベラルな環境が存在した。限定戦争論に対する反対、丸山への博士号授与にみられる学問の独立性、ベトナム戦争後の「内発的告発」、レーガンに抵抗するパークレー校や反核運動などが、それを示すものであり、この環境が丸山との国際的共同体を構築したのであった。入江昭氏は、丸山が、アメリカの学界、社会、文化を評価する一方で、アメリカの政府や政策を厳しく批判したことなどを回顧しているが、本稿ではその具体相を見ることができたと考える。

丸山は、アメリカに関して現在でも意味を持つような卓見を示している。例えば、アメリカの自国国

益重視に対する警戒は、その一つである。長年、冷戦期のアメリカを見続けてきた丸山にとり、冷戦後のアメリカをいかに位置付けるべきかという問題は、一つの難問であった。91年の湾岸戦争に関する言及はそれを示す。丸山は、湾岸戦争でアメリカが「世界の憲兵」になったことについて、一方では「国際的な中央権力」が主権国家を制限しているという点で、「半分正しいんですよ、残念ながら」と、戸惑いながらも許容するが、他方ではアメリカが「ナショナル・インタレスト」を捨てられない点で警戒を維持している[話4-358~359]。前述のように、丸山は51年の時点から、ダレスに代表されたアメリカが自国の国益を重視している点に懸念を示していた。そしてこの懸念は、大量破壊兵器の確定がないまま、単独行動主義によって突入したイラク戦争で現実化することになる。

85年に丸山は、日米関係の変化に関連させながら、歴史に学ぶ態度の重要性を力説している。丸山は、日本人について「あれだけひどい目に会い、かつ近隣諸国をひどい目に合わせながら、そこから一体何を学んだのか」、「戦争中は鬼畜米英といい、枢軸による世界新秩序を謳歌しながら、戦後…米英の自由主義陣営万々歳、とくにアメリカ一辺倒になっちゃったという人がいます」と批判している。さらに丸山は、「大事なのは、日本人が戦争経験からどういうふうな、またどこまで学んだか」であり、歴史の教訓から学ばなければ、誤った歴史は繰り返すという警鐘を鳴らしていた[集12-172~173]。

丸山のアメリカ観は、戦争に対する深い反省と平和への希求を基軸にした歴史認識によって裏付けられた、極めて貴重なものである。「テロとの戦い」や「中国の台頭」など、21世紀特有の問題に伴って、日米関係が新たに問い直されつつある現在、丸山眞男のアメリカ観が残した遺産はいまだに大きい。

謝辞：成稿に際しては、小熊英二先生と渡辺靖先生より、数多くのご助言をいただいた。篤く御礼申し上げます。

注

- 1 『丸山眞男の世界』(みすず書房、1997年)。
- 2 五十嵐武士『戦後日米関係の形成』(講談社、1995年) pp.176-195。林房雄・三島由紀夫『対話・日本人論』(番街書房、1966年) pp.71-74。荻部直『丸山眞男』(岩波新書、2006年) p.4。
- 3 有馬龍夫「丸山先生とハーバード」(『丸山眞男集』第13巻く岩波書店、1996年) 月報。
- 4 入江昭「丸山眞男先生とアメリカ」(丸山眞男記念比較思想研究センター報告、2005年) pp.53-57。
- 5 清水靖久「丸山眞男と米国」(『法政研究』74巻4号く九州大学法政学会)、2008年) pp.59-119。
- 6 『丸山眞男戦中備忘録』(日本図書センター、1997年)。
- 7 『丸山眞男講義録』第六冊(東京大学出版会、2000年) p.13。

〔受付日 2012. 2. 23〕

〔採録日 2013. 7. 17〕